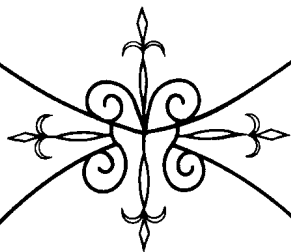


三島由紀夫
全集

評論(1)
著名十七歳の処女評論「古今の季節」後

三島由紀夫全集



25

監修／石川淳 川端康成 中村光夫 武田泰淳
編纂／佐伯彰一 ドナルド・キーン 村松剛 田中美代子

新 潮 社

三島由紀夫全集第二十五卷

昭和五十年五月二十日印刷

昭和五十年五月二十五日発行

著者 三島由紀夫

発行者 佐藤亮一

装幀者 杉山寧

三島由紀夫



発行所株式会社新潮社

〒162 東京都新宿区矢来町七一 振替東京四十八〇八

電話業務部(〇三)二六六一五一一 編集部二六六一五四一一

定価二五〇〇円

第二十五回配本(全35巻・補巻1)

Copyright © 1975 YŌKO HIRAKO A Tokyo Japan

三島由紀夫全集 第二十五卷 目次

無題（「東の博士たち」説明・梗概）	九	人類の將來と詩人の運命について	六〇
古今の季節	三	精神の不純	六
壽	二〇	澤村宗十郎について	六〇
懸詞	七	戀する男	九
森の遊び	三	招かれざる客	一〇
柳櫻雜見録	三	宗十郎覺書	一〇四
夢野乃鹿	六	上手と正義（舟橋聖一「鷲毛」評）	一〇七
東健兄を哭す	四〇	一九四八年への慾情	一〇九
古座の玉石——伊東靜雄覺書	四	跋（「岬にての物語」）	一一
檀一雄「花筐」——覺書	四	相聞歌の源流	一四
序（林富士馬著「千歳の杖」）	五	感情の古典美	三三
跋に代へて（「花ざかりの森」）	五	重症者の兇器	三三
川端氏の「抒情歌」について	六	私の文學	三九
バルタザアルの死	六	師弟	三三
わが世代の革命	七〇	邪教	三九
武田泰淳「才子佳人」	七	ドルヂェル伯の舞踏會	四三
佳品廓文章——東劇十一月評	七	野性を持って——新聞に望む	四四

美しき時代	二五	戸板康二氏の「歌舞伎の周囲」	二四
インダストリー——柏原君への手紙	二五	跋（坊城俊民著「末裔」）	二六
反時代的な藝術家	二六	俳優座に望む	二〇
没落する貴族たち	二六	「火宅」について——作者の言葉	二一
猫「ツウレの王」映畫	二七	小説の技巧について	二四
情死について——やゝ矯激な議論	二七	「火宅」について	二四
そぞろあるき——作家の日記	二八	反抗と冒険——自畫像	二四
宗十郎の「蘭蝶」	二八	歌舞伎と馬	二五
「序曲」編輯後記	二八	ブチ・プロボ	二四
四つの處女作	二九	好きな女優	二四
川端康成論の一方法——「作品」につ	二九	悲劇の在處	二五
いて	二九	一青年の道徳的判斷	二五
某月某日	二七	「假面の告白」ノート	二八
「夜のさいころ」などについて	二九	「刺青」と「少年」のこと	二六
中村芝翫論	二四	ダンス時代	二六
戦後観客的隨想——「あゝ荒野」につ	二九	近代劇「速水女塾」——三越文學座評	二七
いて	二九	無題（歌舞伎役者について）	二九

兩月物語について	二七〇	動物園」評	三五二
美について	二七五	伏字	三五三
戯曲を書きたがる小説書きのノート	二八〇	大阪の連込宿——「愛の渴き」の調査	三五五
武田泰淳氏の近作	二八六	旅行の一夜	三五六
「速水女塾」について	二九一	ジイドの「背徳者」	三五五
作者の言葉（「燈臺」）	二九六	天の接近——八月十五日に寄す	三六七
文化議員に一票——演舞場・俳優座	二九七	「伊豆の踊子」「温泉宿」「抒情歌」「禽	
文藝時評	二九九	獸」について	三六九
極く短かい小説の效用	三〇五	澁谷——東京の顔	三七五
世界のどこかの隅に——私の描きたい	三〇五	「元帥」について	三七九
女性	三〇	作家を志す人々の爲に	三八三
歌舞伎評	三〇四	雲の會報告	三八六
無題（「燈臺」の演出について）	三〇七	九月號の文藝雜誌	三八九
「クレエヴ公爵夫人」——梅田晴夫譯	三〇九	「おぼろ夜」について	三九一
作家の日記	三三三	映畫評「シーザーとクレオパトラ」な	
オスカア・ワイルド論	三三五	ど	三九三
劇評 アメリカの世話場——「ガラス		虚榮について	三九六

夜の占	四〇〇
言ひがかり	四〇七
檀一雄の悲哀	四〇九
完本獄中記——ワイルド作	四三三
源氏物語紀行——「舟橋源氏」のこと	四三五
など	四三七
「晚菊」などについて	四三二
文學に於ける春のめざめ	四三二
芝翫	四三六
女の友情について	四三一
新座右衛門のこと	四三三
あとがき（「聖女」）	四三三
目くじら立てるに及ぬの辯	四三七
顔さまさま——連合展をみて	四四〇
「異邦人」を読む	四四三
高原ホテル	四四七
批評家に小説がわかるか	四四四

新古典派	四五九
當世腑に落ちぬ話	四六三
中國服	四六五
祇園祭を見て	四六六
作者の言葉（「夏子の冒険」）	四六六
革命の詩	四六九
流行おくれ	四七七
谷崎潤一郎	四七四
日本の小説家はなぜ戯曲を書かないか？	四七九
唯美主義と日本	四八四
七彩の几帳のかけに（「姫君と鏡」）	四八七
演劇の本質	四八九
「禁色」は廿代の總決算	四九二
歌右衛門丈のこと	四九三
ラディゲ病	四九六
若い二人の會話——といふよりも・口	四九六

説について	四七
顔・福田恆存	五三
舊教安樂——サン・パウロにて	五五
リオの謝肉祭——リオ・デ・ジャネイロにて	五八
パリの芝居見物——パリにて	五二
パリにほれず	五四
遠視眼の旅人	五六
「班女」拜見	五三
母の料理	五六
ペトローニウス作「サテュリコン」	五九

映畫「輪舞」のこと	五四
「過去世」について	五四
ジャン・ロッシイ作青柳瑞穂譯「不幸な出發」	五四
谷崎潤一郎「刺青」について	五八
映畫「處女オリヴィア」	五〇
リファール待望	五三
作者の言葉（「につぼん製」）	五六
解題	五九
校訂	六一

三島由紀夫全集 第二十五卷 評論 (1)

無題（「東の博士たち」説明・梗概）

説 明

この劇は、新約聖書馬太傳^{マタイ}の第二章に材を得た、即ち次の如くである、

「イエスはヘロデ王の時、ユダヤのベツレヘムに生れ給ひしが、視よ東の博士達、イエルサレムに來りて云ふ。『ユダヤ人の王として生れ給へる者は何處に在るか。我ら東にてその星を見れば、拜せんために來れり』ヘロデ王これを聞きて惱みまどふ。エルサレムも亦併り。王、民の祭司長學者らを皆あつめて、キリストの何處に生るべきを問ひ質しぬ。かれら云ふ、『ユダヤのベツレヘムなり、そは豫言者によりて、（ユダの地ベツレヘムよ、汝はユダの長達の中にて最小さき者にあらず、汝の中より一人の君出でてわが民イスラエルを牧せん）と録されればなり』こゝにヘロデ密に博士達を招きて星の現はれし時を詳らかにして彼らをベツレヘムに遣はさんとして言ふ『往きて幼な兒のことを細かにたづね、之にあはゞ我に告げよ。我も往きて拜せん』彼ら王の言をきゝて往きしに、視よ、前に東にて見し星は、先だちゆきて幼な兒の在す所にとゞまりぬ。」

併し。聖書に忠實を守らず、更に二、三の文献を得たとは云ふものゝ殆ど私自身の創作であつ

て、千人長、亡靈、舞姫の件の如きこれである。次にこの戯曲の梗概を掲げて、讀者の参考に資する。

梗概

その頃ガリラヤ分封の國守として權勢を振つてゐたエロドが、その臣である千人長の爲に舊惡が次々と露見して行くのを恐れ、その憤怒の發火點とも云ふべき夜のことである。

エロドは、政務の餘りの多忙さを忘れるといふ表向で、實は千人長の言々に過去の幻影を想起し、殆ど狂氣の如くなつて、未だ嘗て上つたことのないこの屋上の階に足をかけ始める。王者エロドは常に自分の王であることを意識してゐるのである。彼は、表面羅馬皇帝に絶對服從の如く見せ乍ら、心の内は、何時も王としての自尊心と、皇帝に對する反抗心を持つてゐなければならぬ男である。

併し彼の最も恐れるものは、ユダヤ中の數多の人民に他ならない。——こゝに、王に諂ふ高官たちと、これに對する千人長の反感にあふれた態度と、王の狼狽とが入り亂れる。エロドは遂に、千人長を陥るべく策をめぐらし、他の高官たちに許されてをる筈の言でさへ、その端々をとらへて脅し迫つて、その果、斬首刑吏エモスの手にこれを委ねる。エロドは安堵して胸なで下すが、忽ちその安心は崩される。東の博士達の件、及び不思議な星の出現などによつてである。エロドは興奮して安靜を求めが、こゝにも過去の血みどろな幻が満ちてゐる。他人には、見えぬ姿、他人には聞えぬ聲、これらがすべてエロドの恐怖の對象となる。次いで彼は歡樂を求めると、これも舞姫たちの言によつて歡樂は拒まれる。歡樂を失つたエロドは實行の後に慰安が待つてゐる

であらうと言ふが、慰安は永遠に來ない事を彼は知らないのである。學者たちを呼んだ彼はイエスの生誕地を知り、東の博士達を利用しようとする。彼は成功したつもりであるが、事實はさうではない。再び、新らしく失はれた生命の呼び聲が夜風と共にきこえて來る。エロドは不安さうに戦く。「何時、休息があるのか」と。否、彼には、永遠に休息は與へられてはならない。

無題〈初出〉輔仁會雜誌・昭和十四年三月一日

古今の季節

古今集を繙くごとに、ひとしほつよく感じられるのは、古今の歌人たちが季節にむかふその姿勢である。後年俳諧が生れ、それがひとつの作法として季節といふものを設けはじめたころ、歌のはうの季節はいつか軽んじられはじめた。さうしてこんにち俳句の約束としていはれる季節は、俳句特有の季節のためにも、なくてはならぬ道具といふほどでもなく、たゞ約束のための約束にちかいやうなたむきすらあるのである。まして昨日今日の御時世には、季節のうつりかはりなぞを、ぼんやりとながめくらす人も少からうから、幾百年へだたつた古今歌人の季節をさぐることは、われわれにとつて不可能事であるといつてもよいかもしれぬ。……

それにしてもわたくし共とて風流のおもひを顛沛てんぱいのあひだにさへわすれなかつた人々の子孫である。さうした戦陣の中、生死の堺に風流をおもつた人々のころざしを、つい前まへの時代のひとたちはジエステアだの自己満足だのいつて片付けてしまつたけれども、けふのやうな耀かしい時代のわたくし共は、もう一度そんな氣短かな批評を考へなほし、訂正してゆかねばならぬだらう。またこのやうな時代でこそ、風流のおもひのそこに、きびしく清らかにながれるものを、探り當てることのできるのではないだらうか。われわれが古き世の歌人たちの心を、うづもれた書物のなかにまさぐらうとするのは、そんな心がまへからに外ならない。

王朝にさかえた日記類をよんだ人々は、あの時代の社交界とでもいふものに、たとへばルイ王朝やヴィクトリア王朝の花やかさをとかくみいだしたがる傾きがある。尤もこんにち異邦の文物になれた目でさうした作物きさくをみるときは、時としてルイ王朝そのまゝなけばけばしい花やかさが、平安朝の社交界にもそつくり映つてゐるやうにおもはれる。けれどもそんな日記なり物語なりをいくたびも心しづかによみかへしてゐるうちに、かれらはいままでとんでもない錯覺に陥つてゐたこと、こころづくにちがひない。極言すればそれは人々がかつて到達し得た、もつとも荒涼たる世界である。凡人たちはそれはルイ王朝そのけの榮華に酔うてもゐただらうし、凡庸な恍惚感にひたり切つてゐたこともできたであらう。だが少しでも卓たつれた人々は、——かの佛蘭西フランドル王朝にすら無常のほひをたたへた「クレエヴの奥方」の作者があらはれたが、もつと意識され、もつと高度に——みながみな荒涼とした場所にひえびえとめざめてゐた。まして日記物語類の作者は、十中八九さうした心境を経験しつくしてゐたのだ、と云つてもあやまちではあるまい。例をひいてみれば、「好者すきもの」といふ一語のしめすふかい意味、その上に建てられた、「好者」となづけられる人々の像は、かれらこそそのやうな世の風潮をいちばんにあざやかに見知つてゐたひとびとであることを、物語をとほしてわたくし共に語りかけてくれるのである。更級日記なぞは、社交界の中心に出た人の記録ではないから不問に附するとしても、けふなほ奔放なはなやかさを謳はれる和泉式部の、かの女の日記の中にうつし出された日々の姿は、わたくし共のうつけた空想とはまるで反対なおそろしいほどひえびえとした寂しい姿である。あのやうに文化なり文明なりの咲き誇つた世の中でこそ、はじめて觸れうる愁しみに觸れた人の姿である。その絨景のすくない縷々と述べつゞけられた心理の目録にも、季節の色あひはつよくにじみ出てゐる。行文のと

ころどころに花咲いた歌のかずかずも、季節のかをりがたゞようてゐるか、ときには季節へのおどろきからうかみ出てゐる。かうした事どもは、たゞ日本文學の特質、ひいては日本人の國民性といふやうな抽象されたこと葉で説かれてきたけれども、古今時代から絲をひいた季節のおもひは、なみなみならぬものがあるやうにおもはれる。ながい前置きのあとで、わたくし共は古今歌人たちの季節のところに歩みよつてゆかう。……

*

古今集にはじまつた季わけの編纂法は、まことにその時代のみが生み出しうるものであつたらうし、古今の卷々、季節の歌のかずかずには照らしあはせてみても、たいそういみじいものを感じさせる。古今歌人たちが季節を待つ姿勢は、「春まつころ」なぞといふなまやさしいものではない。むさぼるやうにさへ見えるのである。ほんの一寸季節のきざしがみえはじめると、切ないほどそれに向つてよびかける。さうしてこんにち我々が次の季節を待ちかねる氣もちが、おほくはいまの季節に倦みはじめてゐるからであつて、そのあとにくるものがたとへ苛酷な季節であるにもせよ、なかば變化をもとめるせはしない氣分から一途に索めるのとはちがひ、古今歌人は花のさかりをはじめ、ものみなのさかえる季節に次々とあきることなくあこがれる。春ならば春を、ひたすらに待ち、それをせい一ぱいにうたひ上げ、また哀惜しつくしてから、すぐさま夏のうつくしさに目をむけるありさまは、いささか曲がないやうにさへおもはれる。けれどもこの曲のなさに、わたくしたちは、なにか果てしのないやうなものを耐へてゐるかれらのまことの姿をみるやうな氣がするのだ。待つといふよりも祈るといつた方がよいくらの、かれらの怵へかたには、來る日にそなへる無爲な今日はなく、全身全靈にうたひあげられた至高の今日がありはせぬだ